

木版を重ね
ゆつくりと姿を見せる花は
色や形だけでなく
香りや周囲の空気まで
届けてくれる

宮山加代子さん

木版画家
Kayoko Miyayama



略年譜
1955年 横浜に生まれる。
1978年 東京教育大学(現筑波大学)教育学部 芸術学科絵画専攻を卒業。
1994年 市川市に版画工房「うつし」創設。
2001年 「花の木版画」(日貿出版社)出版。
2003年現在 千葉市在住。日本美術家連盟会員、 国際版画交流協会会員。
主な展覧会歴
1990年より 各地にて個展多数開催。
1990年より CWAJ現代版画展に8回出品。
1992年 アジア現代版画展、 ヨンカース教育文化センター(ニューヨーク)
1994年 シャマリエール国際小版画 トリエンナーレ(フランス)
1999年 宮山広明 加代子二人展(台北)
2000年 第7回国際アマドーラ版画ビエンナーレ 招待出品(ポルトガル)
2001年 日本版画展 Japan 2001 (イギリス)出品
2003年12月16日(火)~22日(月) 池袋三越にて個展開催予定



版をいくつも作り、1枚1枚でいねいに刷る。

イメージを映す、伝統を移す、「描写」の写す。三重の意味が込められた版画工房「うつし」。加代子さんはその響きが「美しい」に似ていることも気に入っているそうです。
見る者の心をなごませ、季節を彩る美しい花が、今日もまたアトリエから咲き誇ります。

谷 津の自然が残る大町自然観察園に隣接して、版画工房「うつし」はありました。アトリエの窓から望む風景は、自然観察園の森が目前に迫り、まるで山深い別荘地を訪れたような錯覚に陥ってしまいます。
宮山加代子さんとご主人の銅版画家・



「Maple in Spring-1」1995年
春の若いモミジを表現。春になり、車道にいつせいに枝を伸ばし、車の勢いら、うっすらと紫色の帯が新緑の波の間に見え隠れする。



「Purple wind-2」2003年
大町自然動植物園に自生しているフジ。春になるとアトリエの窓から、うっすらと紫色の帯が新緑の波の間に見え隠れする。



「Spring wind-8」2000年



「Spring wind-11」2001年



「Spring wind-9」2000年

10数年前に制作した花の作品の第1作目が桜。それ以来毎年のように桜をモチーフにしている。

宮山広明さんが大町にアトリエを構えたのは1994年、9年前の5月でした。「自然観察園の目にしみるような新緑が、それはそれは見事でした。夫がこの家を、一目で気に入ってしまったんですよ」。
油絵からスタートした加代子さんの創作活動は、会社勤めなどでいったんストップしたものの、木版画と出会って再び活動を開始しました。そして、銅版画家としてすでに活躍していた広

明さんの米国留学に同行したことが、改めて日本文化を振り返るきっかけとなり、木版画の特長ともいえるべき「ほかし刷り」に打ち込んでいったのです。「水彩絵の具で和紙に木版のほかしを刷り込んでいくという日本の技術、文化はすごい。これは絶対に残していかなければならないという啓示を受けたような気がしました」。

それでもアトリエを構えるまでは、木版画の技術を持ちながらも、自分の方向性がかめず、何かが違うと思いついて悩んでいたと言います。千葉市内の自宅からアトリエまで車で1時間。気持ちを切り換え、時間をかけて下絵を描くことで表現したいもの、素材を発見したそうです。「作風も今まではガラリと変わりました。ここに来た時は、まだ気持ちのうえで版画家ではなかったたので、このアトリエが出发点と言えますね。あちこちを改装しながら、アトリエも私も育ってきました」と加代子さんは笑いながら話します。

四季を見つめる豊かな感性、花をめぐる優しさが削りあげる繊細な美しさにあふれるほかし刷り…。違う色味を配置しながら同じ色調で整えていく気品のある色づかいが完成されたのです。